

二日市 (5) — 宿場とえびす神

■日田街道の宿場町

かつて二日市は、日田街道の宿場として栄えましたが、それを伝えるような道筋が、今も中央通り商店街に残っています。

文化9(1812)年の太宰府旧跡全図(筑紫野市歴史博物館に複製品蔵)には、博多から南下した道が二日市に入ってすぐ曲がり、さらに進むと紫村(大字紫)の方向へL字型に曲がって山家へ向かう様子が描かれています。L字型の通りは、御茶屋(本陣)に泊まった大名などを警護するための、宿場特有のものです。

二日市が早くから経済、交通の要所であったことは、豊臣秀吉が九州平定後に天満宮領のうち二日市場を除外したことや、筑前領主の小早川隆景が庄屋帆足新左衛門に伝馬(伝令、飛脚、輸送に用いる)を常備するよう命じていることからわかります。黒田氏が筑前へ入ってからは、かつて市場として栄えた二日市は、宿場としての重要性を備えたようです。『二日市宿庄屋覚書』によると、延宝5(1677)年に御茶屋が建ち、元禄元年(1688)に初代代官の吉田七兵衛が赴任しています。

伊能忠敬が二日市を測量したのは、文化9年

▶本町のえびす(二神体)



(1812)9月27日で、「測量日記」には、次のように記されています。「庄屋太作の家に小休止、左に鎮守若宮八幡社、右、制札前に領主の茶屋あり、左に一向宗正行寺、二日市川、石橋四間ばかり、左へ曲ると天拝山に行く道あり、二日市川渡し九間ばかり、博多街道追分に出る……」

■えびす石神

福岡藩内の宿場では、両入り口に「構口」を設けるのが通例ですが、二日市宿では、その場所を示す記録が残っていません。しかし、両構口を挟んで旅籠や問屋などが立ち並んでいたと思われ、それを象徴するえびす石神が本町に祭られています。

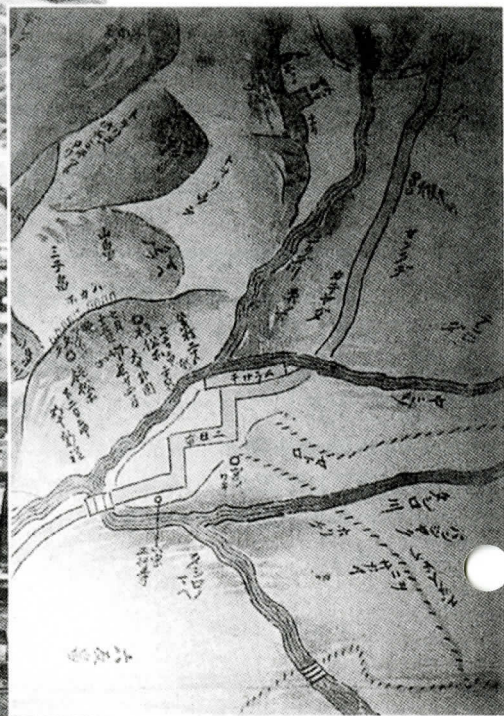
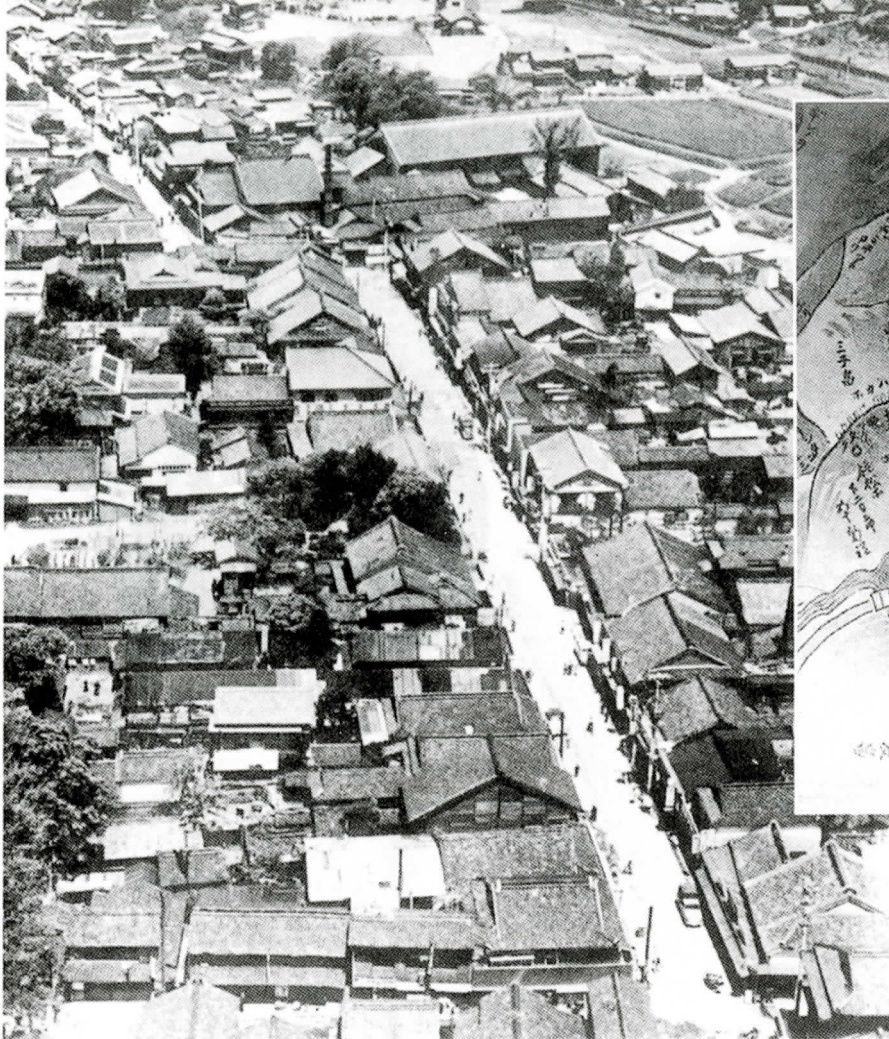
「えびす」とは七福神のひとつで、毘沙門



◀本町のえびす神(下えびす)

▼中町のえびす神(上えびす/現存しない)





▲太宰府旧跡全図に記された二日市。
 ◀昭和30年代の二日市中央通り。カギ型の通りが残っている。

天・大黒天・弁財天・福祿寿・寿老人・布袋と並ぶ福の神です。漢字では恵比須、恵比寿、恵美須、夷、戎、蛭子などと書かれます。豊漁、豊作、または商売繁盛の神として中世以降に信仰を集めました。西宮市の戎神社が総本社で、全国一万カ所に勧請されており、信仰の厚さがうかがえます。えびす神社と同系統の神社、境内社の総計では、福岡県が全国一で、関東以北より西日本地域に多く祭られています。

本町のえびすは、高さ2尺あまりの自然石で木格子の祠の中に納められており、石の表面に、大鯛を小脇に抱え、釣竿を手にした烏帽子姿のえびす様が彫り込まれています。傍らののぼりを立てる石には「万延2(1861)年寄進 谷太七」と刻まれています。地元の造り酒屋であった谷家によるものです。このあ

たりは旧二日市の下町なので「下えびす」といい、中町には「上えびす」が祭られています。こちらは高さ1尺あまりの低いやしろの中に、ふたつの自然石をご神体としたものです。やはり谷家が自らの屋敷の一角に事代主命(大国主命の子で、えびすと同じといわれる)を祭ったことが古い記録に見えます。

二日市えびす祭は、12月3日が縁日にあたる師走の恒例行事です。昔から商店街では、えびす祭りにちなんで年末の大売り出しが催されています。

〈参考〉

筑紫野市立歴史民俗資料館編

「ふるさと筑紫野」1984年

近藤典二『筑前の街道』1985年

(村里徳夫)